

## 第49回世界連邦推進全国小・中学生ポスター・作文コンクール

### ポスターの部 もくじ



文部科学大臣賞

「どちらの未来を選びますか」

綾部市立上林中学校 二年 <sup>さとう</sup>佐藤 <sup>ゆうき</sup>悠季



特賞

「みんながえがおに」

武蔵野市立桜野小学校 二年 <sup>おきもと</sup>沖本 <sup>ななみ</sup>七海



特賞

「すみかをうばわないで」

武蔵野市立大野田小学校 六年 <sup>うえはら</sup>上原 <sup>もあ</sup>萌愛



特賞

「世界はひとつ」(はり絵作品)

海津市立平田中学校 三年 <sup>もりかわ</sup>森川 <sup>ひめか</sup>姫花



湯川スミ賞

「ダイオキシンの恐怖」

青梅市立新町小学校 六年 <sup>やまだ</sup>山田 <sup>ゆう</sup>優羽

👑 文部科学大臣賞  
「どちらの未来を選びますか」

綾部市立上林中学校 二年 <sup>さとう</sup> 佐藤 <sup>ゆうき</sup> 悠季



👑 特賞

「みんながえがおに」

武蔵野市立桜野小学校 二年 おきもと 沖本 ななみ 七海



👑 特賞

「すみかをうばわないで」

武蔵野市立大野田小学校 六年 <sup>うえはら</sup> 上原 <sup>もあ</sup> 萌愛



👑 特賞

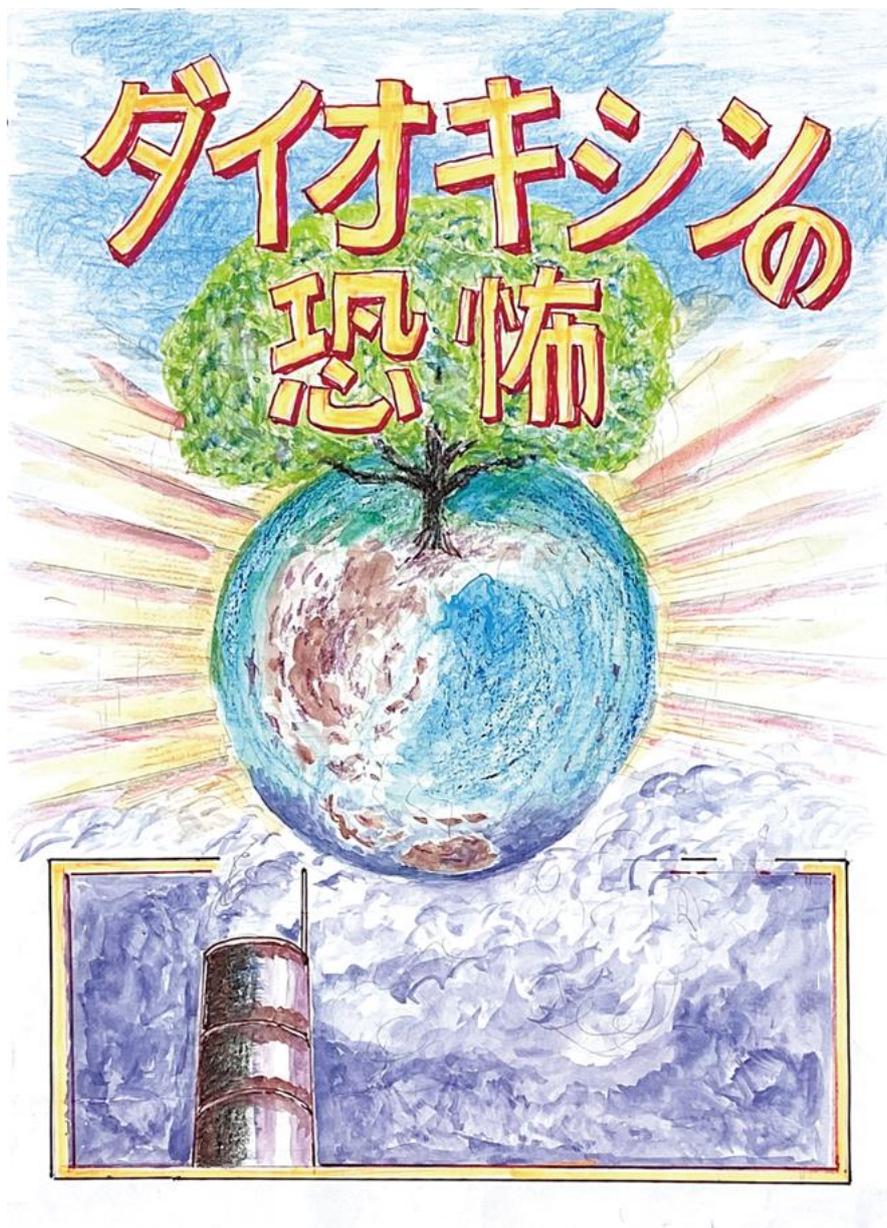
「世界はひとつ」(はり絵作品)

海津市立平田中学校 三年 もりかわ ひめか 森川 姫花



👑 湯川スミ賞  
「ダイオキシンの恐怖」

青梅市立新町小学校 六年 やまだ ゆう  
山田 優羽



作文の部  
もくじ



文部科学大臣賞  
「知る・認める・考える」

富士宮市立富士宮第二中学校 一年 <sup>わたなべ</sup> 渡邊 <sup>はると</sup> 春翔



特賞  
「あたりまえの毎日」

大館市立有浦小学校 六年 <sup>かたおか</sup> 片岡 よつば



特賞  
「平和な日々大切さ」

大館市立有浦小学校 六年 <sup>あぶかわ</sup> 虻川 <sup>りの</sup> 莉乃



特賞  
「世界を変える」

岡山県立岡山大安寺中等教育学校 三年 <sup>てらにし</sup> 寺西 <sup>まゆこ</sup> 真友子



湯川スミ賞  
「私達が平和に暮らせているのは」

岡山県立倉敷天城中学校 一年 <sup>おおしま</sup> 大島 <sup>みお</sup> 実桜

👑 文部科学大臣賞  
「知る・認める・考える」

富士宮市立富士宮第二中学校 一年 わたなべ はると 渡邊 春翔

僕が住む日本は、きれいで、治安が良くて、食べ物が美味しい住みやすい国だ。僕達は当たり前のように学校で勉強できる。習い事へ行ける。家でテレビを見ることができる。しかし、ずっと前からそうだった訳ではない。今から七十五年前の八月、日本には原子爆弾が落とされた。外国と戦争をしたのだ。市街地は大きく破壊され、広島と長崎を合わせると三十万人以上の尊い命がうばわれた。その後日本が降伏することで戦争は終わり、日本は平和な国への一步をふみ出した。戦争は終わった。だが人々は戦争を忘れてはいない。二度と繰り返してはいけない歴史として恐れている。それが如実に表れているのが日本国憲法三原則の一つ、戦争放棄だ。これを掲げているおかげか、あれ以来日本は直接的には戦争に関わっていない。では、世界はどうだろう。

僕が小学校六年生のとき、先生がこんなことを言っていた。

「アフリカの国々ではいまだに民族や国々の間で争いが続いている。」

僕たちが日常を楽しんでいる中、アフリカの国の人々は紛争から必至に逃げ延びようとしているかもしれない。あるいは、紛争で家族を失い、悲しみに暮れているかもしれない。そう考えると胸が締めつけられた。

このように、世界からはまだまだ戦争が無くなりそうにない。では、どうすれば良いのだろう。答えは案外簡単なことだと思う。それは戦争を知ることだ。僕達は本当の戦争を知らない。だが戦争がどんなに悲惨で、どれだけ多くの命をうばうかは知っている。それは何故だろう。戦争を経験した人が僕達に語り、その恐ろしさを教えてくれているからだ。しかし、戦争を経験した人の数は年々減っている。僕達にはそれを次の世代へとつなぎ、永遠の平和を願う義務がある。そのためまず自分が戦争について知ることが大切だ。

また、お互いを認め合うことも重要だ。世界は広い。七十五億人もの人々が暮らしている。それらの人々は、全員が同じ言語・文化・考えまたその他のことを共有している訳ではない。その一つ一つを気にしてはきりが無いが、膨大なことだけは確かだ。しかし、人はすぐ自分が正しいと思いつく。一度そう思うと、今度は相手が分からなくなってくる。それはやがて、相手への反感へと転じ、けんかやいじめの原因となる。その拡大版が戦争と言えるだろうと僕は思う。つい最近、道徳が教科の一つとなった。それは、いじめが増えているため、みんなに道徳心を持ってもらいたいからだそうだ。まさに、お互いを認め合うことが重要だということを示す典型的な例だ。

戦争はいけない。戦争は世界を大きく変える。戦争は多くの命をうばう。そしてうばわせる。だれもが「戦争なんてしたくない。この世から消えて無くなれ。」と思っているはず

だ。だが戦争は無くならない。何故戦争なんてするのだろうか。議論することで解決できないのだろうか。戦争することのどこに利益があるのだろうか。戦争の恐ろしさを知っているのだろうか。次々に疑問が浮かんでくる。考えれば考える程出てきそうだ。こうして考えることも、平和への道のりの通過点だと思う。

知る・認める・考えるは、戦争が無くなった世界の三原則となるかもしれない。



特賞

## 「あたりまえの毎日」

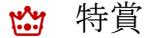
大館市立有浦小学校 六年 <sup>かたおか</sup>片岡 よつば

普段は平和について考えることはほとんどないが、社会で戦争の勉強をした時や八月の終戦記念日にテレビから戦争のニュースが流れてきた時、私は平和について考える。日本でも戦争があり、たくさんの人が死んだり、苦しい生活をしたりしていた。それはすべて戦争のせいで、戦争さえなければ平和なんだと思っていた。

しかし、今年、人々の命や生活をおびやかすものは、戦争だけではないことを知ることになった。新型コロナウイルスだ。学校が休校になり、友達に会えない日々が続いた。オリンピックもなくなったし、何より、毎日ニュースで流れる感染者の数と死者の数に胸が痛くなる。病院や施設での面会もできなくなり、ふるさとに帰れない人もいる。家族と会えない人はどんな思いで暮らしているのだろう。いつになったら普通の生活に戻れるか分からない今の状況は、平和とは言えない。そう考えると、震災や豪雨災害も平和な暮らしを一瞬にして奪ってしまう。戦争がなければ平和なのではない。

では、私は今何ができるのだろう。過去の争いや病気、災害を悲しむだけでは何も解決しない。自分はまだ子どもだから何もできないというのは、逃げているだけだと思う。私にできることは、人の気持ちを考えること。年老いた人や持病をもっている人は、コロナをととても恐れているだろう。だから、感染を広げないように消毒をしたり、マスクをしたりしたい。医療従事者の方やボランティアの方に感謝の気持ちをもって暮らしたい。学校で行う避難訓練を真剣に行いたい。ニュースで正しい知識を得て、正しい判断ができる大人になりたい。大きなことはできないけれど、人を思いやることはいつでもできると思う。

世界中の人に、あたりまえの毎日がもどる日がくることを心から願っている。



## 「平和な日々大切さ」

大館市立有浦小学校 六年 <sup>あぶかわ</sup> <sup>り</sup>の 虻川 莉乃

平成二十九年八月二十九日。この日は、私にとって忘れられない日となりました。

「九才のおたん生日おめでとう」

と、家族から祝福の言葉で朝を迎えるはずだった私の誕生日。しかし、今まで聞いたことがない携帯電話の鳴り響く音と、

「大変だ、早く起きろ」

と、父の焦った声で私は目覚めました。何が起きたかわからないまま飛び起き、枕を頭にあて家族と身を寄せ合いました。父に状況を聞くと、北朝鮮が弾道ミサイルを発射し、警報システム「Jアラート」が鳴ったとの事。話を聞いている最中もJアラートは鳴り響き、ミサイルはものの数分で大館市に近づいて来ているという。私達家族は恐怖におびえながら、ただただミサイルが大館に落下しない事を祈るばかりでした。運良くミサイルは北海道襟裳岬東の太平洋上に落下し、被害はなく一安心したのを昨日のことのように覚えています。私はこの時まで、戦争なんて昔の事と軽く考えていたし、家族がいて、ご飯を食べて、きれいな洋服を着て――

全ての日常の平和をあたり前だと思っていました。

日本は今年の八月、終戦から七十五周年を迎えました。戦争を体験した人々は高齢化し、戦争を知る人は少なくなってきています。実際に私の祖父も戦争の体験者でしたが、昨年亡くなりました。私たちは、祖父が体験した苦しみや悲しみを無駄にする事のないよう、戦争の悲さんさや平和の大切さを周囲に語りつぎ、二度と戦争を繰り返す事のないようにしなければいけません。それが戦争を知らない私たち出来る事として与えられた役目だと思います。

まもなく私の十二回目の誕生日が来ます。三年前のあの日を繰り返すことなく、平和な朝を迎えることが出来るように。

👑 特賞  
「世界を変える」

岡山県立岡山大安寺中等教育学校 三年 寺西<sup>てらにし</sup> 真<sup>ま</sup>友<sup>ゆ</sup>子<sup>こ</sup>

「偏見を持つてはいけない」、日常生活の中でもよく耳にする言葉です。しかし私たちはその言葉の意味を本当に理解しているのでしょうか。また意味をきちんと理解していても実際に自分の行動の中でそれができているのでしょうか。例えば、世界の国々に対してのイメージはどうでしょう。「核兵器をたくさん保有しているからこの国は怖い」「この国は親日だから好感が持てる」といったイメージが私たちの中にはあると思います。このイメージ自体は偏見ではありませんが、もしその国の人々と交流するとなるとどうでしょう。それらのイメージは少なからず私たちの接し方に何か影響を与えることがあると思います。

昨年十一月、私は「岡山県中学生韓国慶尚南道交換留学」というプログラムで韓国の慶尚南道市を訪問しました。もともと韓国の文化に興味があり、二年前に同じプログラムで日本を訪問した慶尚南道の中学生のホームステイを受け入れたことがきっかけでした。訪問団に選ばれたことが信じられないまま説明会に参加したのですが、厳しい現実をつきつけられました。当時、日韓の社会情勢は最悪といわれ、韓国にいる日本人が嫌がらせを受けるなどの被害もありました。実際、訪問中止の可能性が大いにありました。しかし、岡山県と慶尚南道の教育委員会の方々のご尽力くださり、実行が決まりました。それでも情勢が変わることはなく、私は不安を抱えていました。

しかし、韓国での経験は私たちの予想とは全く別のものとなりました。現地の方々はとても手厚く私たち訪問団を歓迎してくださったのです。訪問した県庁や三つの学校では職員や生徒の皆さんが列を作って大きな歓声と拍手を送ってくださりました。伝統楽器を使った演奏を披露してくださったり、校舎の窓から手を振ってくださったりしました。それはまるで私たちを安心させようとしてくれているかのようでした。あの時の感動、そして安心感は今でもはっきりと覚えています。国と国の関係がどうであつても私たち人間は温もりを共有することができるのだと感じました。

そして、私が更に驚いたのが、韓国の方々の語学能力の高さです。英語の水準がとても高く、実際に授業へ参加して日本との差を痛感しました。そして英語でのコミュニケーションを通じて英語は私たち人間がひとつになるためにとても大事な要素であると分かりました。また、たくさんの方が日本語で話しかけてくださり、とても私たちに好意的でした。訪問団の皆がもっと韓国語を勉強してくればよかったと思うほどで、言葉が通じるということの重要さに気づかされました。

このように、人々の心と国の情勢は必ずしも結びついていません。つまり、私たち一人一人の行動や接し方を変えていくことで国の情勢をも変えることができます。そして、

海外の方と交流を深めるためには言語がとても大切です。世界を変えることができるのはこの世界にいる私たち自身なのです。

## 湯川スミ賞

### 「私達が平和に暮らせているのは」

岡山県立倉敷天城中学校 一年 おおしま 大島 みお 実桜

みなさんは、「平和」について深く考えたことがあるだろうか。あまり考えたことのない人が多いと思う。私も、長崎に平和学習に行くまでは、そんなに考えたことがなかった。その原因の一つとして考えられるのは、私達が住んでいるこの世界は平和だから、ということだ。私達は大きな戦争も、不自由な生活も体験したことがないのだ。しかし、体験していないから、終わったことだからと言って、忘れてしまっはいけないのだ。過去にあった、つらい出来事も次の世代に受けついで伝えていかなければならないのだ。

私は去年の八月に長崎県に行った。戦争のことや被爆のこと、「平和」について学ぶためである。平和祈念館に行ったり、被爆者の方々にお話を聞いたりした。また、被爆していない若い方々がつくった紙芝居も聞かせていただいた。その後は、平和祈念式典に参加した。長崎に行って、たくさんの貴重な体験をすることができた。その中でも三つのことを紹介したいと思う。

一つ目は、被爆者の方々による体験談だ。戦争が終わってから七十五年が経つため、そういうことを語ってくださる方々が減っているが、お話を聞くことができた。その内容は、今は平和な日本に本当にあった出来事なのかと疑いたくなってしまうほど、悲惨なものだった。何故、無実の人達のような目にあってしまったのか。私は、とても悲しくなった。また、原爆で亡くなった人も多いが、その後の後遺症で苦しんだ人が多かったということに驚いた。放射線をあびてしまい、体にたくさんの害があった。とても苦しかったらと思う。このように辛く、苦しい出来事を、何故語ってくれたのか。それは、私達若い世代に知ってもらい、もっと先の人達にも知ってもらうためだと思う。私達が、この悲惨な出来事をもっと知り、たくさんの人々に伝えていきたいと、強く思った。

二つ目は、平和祈念式典に参加したことだ。八月九日に行われるため、とても暑い。しかし、たくさんの人々が参加していた。この様子はテレビで毎年継ぎされている。この式典に参加することで、今、私が生きているこの「日常」は、当たり前ではないということを感じた。それと同時に、「平和」であることへのありがたみを感じた。平和な日常に、ありがたみをもって生きていきたい。

三つ目は、戦争や原爆のことについて伝えようとしている、若い世代の方々だ。私はまだ何もできていないのに、すごいなと思った。また、具体的にどのように伝えればよいのかも分からなかった。しかし、彼らのように、紙しばいや絵本など、誰でも分かるもので表せばよいと、気付くことができた。人に伝えるのは大変なことだけれど、私も、少

しでも伝えていきたいと思った。

私達が平和に暮らせているのは、過去があったからだ。辛いことを乗り越えて、頑張ってくれた方々がいたから、今の「平和」があるのだ。しかし、その事を忘れて平和に暮らしてはいけない。後世に伝えていくのが大切なのだ。この生活に感謝しながら、たくさんの人々に伝えることで、「平和」を共有していきたい。